

## 入学検査問題

## 国語

(五十分)

(受検上の注意) 答えは、すべて解答用紙に書きなさい。字数制限のある問題では、句読点や記号も一字に数えます。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

顔を布でぐるぐる巻きにした男は、もう公園広場の★カフェにひとり来ていた。お客はほかに誰もいない。息を切らしたぼくのほうへ、男はゆっくりからだをむけると、右手を軽くあげて、二度、三度と目立たなくらいにふった。きっと布のすきまから見えているんだろう。息をととのえて歩みよる。日よけの下の同じテーブル、真正面の席にすわる。

「正確じゃないか」  
ぐるぐる巻きの男は時計台を指さして、

「ちようど午後の二時。いい感じだ」

風体には似合わない、木がきしむような甲高い声。白い麻の上下を着ているけど、あまり仕立てがよくはみえない。羊毛商のおじさんが以前いつていた商売のこつは、とにかく約束の時間に遅刻しないこと。ぼくはできるだけ自然なふうに、口元に笑みを浮かべ、

「だってこんな暑い日に、お待たせするわけにはいきませんか」  
「」

「ありがたいねえ」

男はこたえた。じつさいこの夏休みいちばんくらしい暑さで、日の当たる表通りでは途中まったくひとかげを見なかった。ときどき生ぬるい風が土ぼこりをまいあげ、**a**と粘る肌**b**に黄色い模様をつくる。店の奥ではふだん意地の悪いご主人が、カウスターに肘をついて背中をまるめている。

「なにか飲むかね」

ぼくは考えこむふりをした。ほんとうはなにも欲しくなかったし、一刻もはやくうちへ戻りたかったけど、羊毛商のおじさんは、大事な買い物ときはあせつちやだめだ、ともいっていた。かえって相手をじらすくらいでなくつちやな。それでおじさんはあの、らせん階段のある三階屋敷を手にいれたんだ。

「なにもいりません」

①と、ぼくはいつてしまう。

「それより早く、その笛をみせてください」

「いいだろう」

男は布の下で笑うと、足もとのかばんを膝の上においた。ジッパーをあけ、油紙の包みをとります。紙包みのなかから、ところどころ塗りのはげた木製の縦笛があらわれた。男は胸もとからそれを離さず、まるで抱きかかえるようにして両手でささえた。

「これが？」

「ああ」

と男はいった。

「まさしくこれが魔法のリコーダーさ」(I)

一昨日の晩、薬屋からでてきたぼくを、ぐるぐる巻きの男が呼びとめた。急いでいたのでそのまま行きすぎようとしたところ、

「いもうとさん、たいへんだらう！」

とうしろからいわれた。

ぼくの足は動かなくなつた。男は近づいてきて、その場で自己紹介をはじめた。

いきなりの話で申し訳ない。自分はいま街の劇場にきている人形劇の団員である。三年前ひどいやけどを負つたので、舞台役者をやめ、こうして人形つかいになった。自分にはほかの団員にも知られていない秘密があつて、じつは魔法の修行中なのだ。ひとのこころがのぞけたり、ひとの願いをききとってほんとうにしたりができるのだ。

ぼくはあきれかえつた。どんなまぬけ面でもこんなくだらないことをいつてるのか、顔の布をはぎとって見てやろうかとおもつた。

「きみが疑うのはしかたないな」

と男は高い声でいった。

「けれどいまも魔法をつかっている。わたしの足もとを「らん」視線をおとすや、ぼくはひと声もあげられなかった。男の白い革靴は、地面の上三センチほどの高さに浮かんでいた。男はそれからたてつづけに奇跡を披露した。コインを空中に浮かせたり、路地裏からでてきた猫と話してみせたり。男はぼくのビリヤードの最高点をいいあてることもできた。ぼくについて、ぼくの知らないことまで知っているような感じだった。

「願いがかなう魔法の笛をきみに売ってあげよう」  
とぐるぐる巻きの男はいった。

「思い悩む少年に魔法の種をわけるのも、わたしのたいせつな修行のひとつだから」

ぼくの頭のなかでいろいろな数字が**b**とまわつた。こころみに、笛を売った代金のつかいみちを男にたずねてみると、少し照れくさそうに、古物商でみつけた古人形をかうつもりだ、とこたえた。魔法でお金をふやすのは、ぜったいにしちやいけないことのひとつらしい。

テーブルのふちをにぎつたぼくは、あからさまに拍子抜けした顔をしていったんだとおもう。まかふしぎな模様や呪文が刻まれた、あやしげな笛を想像していたからだ。男はちゅちゅと舌をうつつ、これは自分の師匠の家は何代ものあいだ伝わつた秘密の笛だ、何人もの魔法つかいが秘儀をこらしてつくりあげたのだ、といった。

「要らないのなら、もうはなしは終わりだ」

「待つてください！」

ぼくはいつてもう一度そのリコーダーをみた。小学校でつかつたのより、いくぶんか大きい。ぼくの頭をこづいた音楽教師の笛より、たしかに立派そうにみえる(ぼくの音楽の成績はさんたんたるものだった)。

「これをどうつかうんですか」

「実にかんたんだよ。わたしが誰にもつかってもらえるように改良しておいた」

男は顔をおおう布のあいだに吹き口をさしこみ、ちらちらと手指を動かしながらことばをつづけた。願いをかなえるには、同じ曲を七回くりかえして吹き鳴らす。そのあいだずっと、胸のなかで願う事となえつづけていること。うまく吹けるかどうかはたいした問題じゃない。祈る強さこそが、魔法をかけるこつなのだそう。音感がわるいぼくはちよつぴりだけほつとした。

「おたくら、ちよつといいかね」  
ふりかえると店のご主人がお盆をもち、しかめつ面を男にむけ立っていた。ぐるぐる巻きの男はなんにもこたえない。

「ご主人は咳払いをして話をつづけた。」

「おれはね、この店を四十年きりもりしている。もとは青物屋だったんだよ。これまでカウンターのなかから、いろんなお客を見てきた、そいつの性根がどんなふうなのか、ひと目みりやあ、だいたいわかっちゃうくらいまでおいぼれもした。この坊主のおやじだつてがきの頃からおれは知っている。多少けんかつ早いところはあるが、根は気のいいやつなんだよ」

「父さんはここへはあんまり……」

いいかけたぼくに、

「おまえは黙っていな」

ご主人はびしやりといった。

「いいか、この坊主は、おやじよりよほど肝はすわつてる。ただ、まだ十二歳ぼつちだ。男同士のとりひきに口をはさんで申し訳ないが、おたく、ほんとうにそのおんぼろ笛をこの坊主に売りつけるつもりなのかね」  
ぐるぐる男はしばらくの沈黙のあと、

「その子に聞いてみたほうがいいな」といった。

「欲しがっているのはその子なんだから」

「ご主人はcと鼻の先をかいてぼくのほうへ目を落とした。ぼくはなんだか無性に腹立たしく、また、それがなんのせいだか皆目見当もつかなくて、ただひたすら口を結び、テーブルの上をにらんでいた。男がそのとき、布のなかでけほんけほん」と咳をした。

「あ、まただ。いままた、いもうとさん、発作がきたみたいだな」

かぼそい声でつぶやく。

「発作だと？」

ご主人の口調がかわった。

「おたく、そんなこともわかるつてののか？」

すつとんきような声で叫ぶ。

「もちろんだとも」

男は深々とうなづいて、

「すぐく苦しがつている。わたしにはわかる」

ぼくは椅子から跳ねあがり、男の手からリコーダーをひったくると、ポケットから封筒をだしてテーブルにたたきふせた。三年かけてためたアルバイト料の半分。来年手こぎポートを買うためのたいせつな頭金。

ふたりに何をいったかおぼえていない。ぼくは笛を握りしめ、あせんとする彼らをもその場に残して、全速力で通りを走り出した。坂をのぼり、街はずれの林を抜ける。青色屋根のうちが見えてくる。なんだかいつもよりしんと静まっているような気がする。ぼくは足をもつれさせながら玄関へ飛びこんだ。

「あら！」  
母さんが花瓶をかかえてふりむいた。

「どこいったの？あの子、ようやっと目がさめたのよ」

②「目がさめた、つて？」

「いつてあげなさい。おにいちゃん、おにいちゃん、つてさつきからうるさいんだから」

ぼくは二階に上がり、部屋の戸をあけた。先月五歳になったばかりの妹が、窓辺のベッドにすわっていちじくを食べていた。

「おにいちゃん！」

真つ赤な頬で、こつちへと手をのばす。

「おまえ……」

A「ほんとに元気か？だいじょうぶなのか？」

B「うん！ぜんぜん平気！」

「やだあ、おにいちゃん」

妹が笑う。

C「いちじくわけてあげようか？」

「それでおまえ、いつから起きてるんだ？」  
妹はベッドにすわりなおし、うーんとおおげさに腕組みをし

て、

「目がさめてすぐ、お昼ちようどの番組をきいたよ」

枕元にぼくが誕生日に贈った時計付き小型ラジオが置かれてある。ぼくがカフェにはいったのはまちがひなく午後二時。

いまは三時を十分ほど過ぎたところ。

「じゃあ」

ぼくはめまいをこらえてたずねた。

「発作なんて起きやしなかったんだな」

妹は笑っていちじくを頬ばった。背後でdはいってきた

母さんが、ぼくの突然のうめき声におどろき、ひまわりでいっ

ぱいの花瓶を床へおとした。

それから一週間も経たないうち、妹はもとどおり元気になった。ぼくがたき付けにしようとしたリコーダーを、ちようだい

ちようだいといつてせがみ、日がな一日、裏庭のタイヤにす

わつて吹き鳴らしている。音痴なぼくの耳にさえ、妹の笛がす

ばらしい音を奏でていることはわかった。どんな練習をしたの

かたずねると、勝手に指が動いてくれるの、と妹はこたえた。

笛を吹きながらさ、なにか考えているのかい、そうきいてみる

と、

「もつとうまく吹けますように、つて」

すいかを割つたような笑顔でいう。

「この笛で、もつと素敵な音楽が奏でられますように、つてねー」

夏休みがおわらないうち、人形劇団は街をでていった。広場

のカフェへはあれから一度だけでかけてみた。ご主人は仏

頂面で、顔を布でぐるぐる巻にした男のこと、笛のことは、

いつさい口にしなかつたし、ぼくと視線を合わそうともしなかつた。ぼくのほうでも話しかけるつもりはない。カウンターの

裏でいつも皿を洗っている、ご主人の甥っ子だというウェイ

ターの声に、ぼくはたしかに聞き覚えがあるように思う。お客

たちのうわさでは、手品師として以前、舞台上に立つたことがあ

るらしい。賭けポーカーでいかさまをやつて、興行の世界からた

たたたきだされたという。

ただ、ほんとうのことは知りようがない。あの男の顔は、ずつと布きれにくるまれていたし、<sup>③</sup>店のふたりがぐるだつて証拠は、どこにも残ってやしないのだ。羊毛商のおじさんにきかせたら、あきれて卒倒するだろうか。ときどきむしやくしゃしたことがあると、ぼくは裏の物置に同じもり、妹にやったあのリコーダーを低い音色で鳴らしながら、

「あの店の屋根いまずぐ落ちろ」  
「あの店の屋根いまずぐ落ちろ」  
「あこの店の屋根いまずぐ落ちろ」  
ところの中で強く念じる。まだ同じ曲を七回くりかえしたことはない。六度目を吹きおえたたん、なんだか胸のなかがざ

わざわとなつてきて、すぐ物置からとびでてしまうのだ。最近、近所のおばさん連中や、散歩途中のおじいさんが、庭の前に立ち止まり、妹の笛に耳をすませていることがよくある。おばさんたちは口々にいう。素敵ねえ。なんてきれいな音なのかしら。この世の音楽じゃないみたい。まったくあれは、魔法の笛だわ。  
④ ぼくは二階の窓から首をだして、  
「魔法なんかじゃないよ！」ぼかんと見あげる彼女らにいう。  
「妹の腕がいいんだよ！その笛はただの笛、そこいらにある普通の笛さ！」

(いしいしんじ「魔法のリコーダー」による)

(注)

- ※1 カフェ：コーヒー店。喫茶店。
- ※2 ビリヤード：室内球技の一つ。玉突き。
- ※3 青物屋：野菜やくだものを売る店。八百屋。
- ※4 頭金：支払い回数を分けて品物を買うときの最初のお金。
- ※5 日がな一日：朝から晩まで一日中。
- ※6 仏頂面：不機嫌な顔。ふくれづら。
- ※7 甥っ子：兄弟姉妹の男の子ども。
- ※8 賭けポーカー：いかさまをやつて、興行の世界からたたきだされた：お金をかけてやったトランプゲームでするい事をして反感を買い、同業者から仲間はずれにされて仕事ができなくなった。

問一 線部「性根」は上下の漢字を入れかえると「根性」となり異なる意味を持つ言葉になります。このように上下の漢字を入れかえるとそれぞれ意味を持つ言葉になる二字の熟語を本文中から探して、二つ答えなさい。

問二 

a
---

d
---

 に当てはまる言葉として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。  
ア くるくる イ ぼつぼつ ウ しずしず エ べたべた

問三 線部①「と、ぼくはいってしまふ」とありますが、「と、ぼくはいった」と表現するのに比べて、どのような効果がありますか。それを説明したものととして、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 相手にあまく見られないように、自分の立場を強く見せようとする意志が強調される。
- イ 相手の親切な言葉に対して、冷たく言い過ぎたことを少し反省する気持ちが強調される。
- ウ きんちようから本心とはちがう言葉が、ついつい口をついて出たという感じが強調される。
- エ どうしようかいろいろ迷ったが、どちらでもよくなって投げやりになった様子が強調される。

問四 (I)のあとから「昨日の晩」とあるように、時間がさかのぼり回想場面になります。再び現在の場面にもどるのはどこからか、最初の五字で答えなさい。

問五 線部②はどのような気持ちで発したのでしょうか。それを説明したものととして、最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 妹の調子は悪いと思ひこんでいたので目がさめたと聞いてとまどっている。
- イ ぐるぐる巻きの男の言ったことがうそだとわかって怒りがこみあげている。
- ウ 大金をはらって魔法の笛を手に入れたのにむだになってがっかりしている。
- エ 調子が悪いと思つて急いで帰ってきたがそれほどもなくほつとしている。

問六 

A
---

C
---

 に当てはまるものとして最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア ぼくははつと顔をあげ、
- イ ぼくは勇気をふりしぼつたずねた。
- ウ ぼくはあつけにとられ、立ちつくしたままでいった。
- エ ぼくは背中から芯が抜かれたみたいな気分で、おもわずベッドの上に手をついていた。

問七 線部③について、もし「店のふたりがぐる」だった場合、「ご主人」のどのような行動がどのような役目を果たしたことになるか。八十字以上九十字以内で説明しなさい。

問八 「ぼく」はなぜわざわざ窓から首を出して——線部④のようなことを言うのでしょうか。この時の「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア きれいな音は笛のせいだと思われる妹をかわいそうに思い、かばおうとしている。
- イ この世に魔法なんてありえないのに、それを信じているおばさんたちをばかにしている。
- ウ 簡単にだまされてしまった自分に腹が立ち、魔法の笛ではないと自分に言い聞かせている。
- エ くやしい思いをしているのも知らずに、無責任なことを言うおばさんたちに腹が立っている。

二 次 の 文 章 を 読 ん で、あ と の 問 い に 答 え な さ い。

昨年秋からロンドンに留学している。日本の科学・技術を外から眺め、英国のそれを内側から眺めると、いろんな違いが見えてくる。私は、日本には「科学は文化」という共通認識が国民の中に成熟していないと思う。これは渡英前からぼんやりと頭で考えていたことだが、こちらへ来てその思いを強くした。①さほど努力しなくても、ロンドンには科学・技術に触れられる機会がたつぷりある。科学博物館と自然科学博物館は当然として、劇場街には、\*チャプリンの銅像と一緒に\*ニュートンの\*彫像がある。②彼がこの広場の近くに住んでいたからなのだが、名優と名科学者の共演は、日本ではあまり目にしない。英国国民の意識の中に、科学・技術の巨人たちが普通に存在している。

この一年間、割とこつこつ通ったのは、英国各地で開かれている科学フェスティバルである。年間二十を超えるフェスティバルが定期的に開かれている。日本にも「青少年のための科学のサイテン」や「夢・化学—21」のような全国規模の催しがあり、それぞれ万単位の集客を誇る。ただ両国のフェスティバルには思想や運営にかなりの違いがある。

日本のそれらが主に、学会関係者や教師の組織など、その業界の関係者によって企画・立案・運営されるのに対して、英国のフェスティバルはフェスティバルの専門家が企画・運営し、そこに科学・技術の関係者が協力するのが常だ。そもそも会場となる街は、長いフェスティバルの歴史を持っていることが多い。文学や音楽や演劇や\*ジャズなど、様々なフェスティバルが年間を通して開かれている。そのソザイの一つとして一九八〇年代から「科学」が加わった。

六月上旬に参加した\*チェルトナム科学フェスティバルは二〇〇一年に始まった。ターゲットを「知的好奇心(科学に限らない)のある市民」に絞っており、プログラムには遺伝子組換え食品や肥満、気候変動など、論争のあるテーマが並ぶ。パンフレットも科学とは無縁なイメージを与えるデザインを採用する。スター研究者や著名な\*ジャーナリストを壇上にマネキ、聴衆には彼らと直に話せる機会を多く提供する。ベストセラーを多く書いている\*リチャード・ドーキンス氏の講演兼サイン会は入場料十\*ポンド(約二二〇〇円)だったが、約五百枚のチケットは数週間前に売り切れた。この値段で五百人を呼べる科学者は、日本に何人いるだろう?

日本の科学系フェスティバルが「科学の魅力を知らせる」「子どもの理科離れを改善する」など明確な目標を設定するのに比べると、英国のフェスティバルは目標が見えにくい。あえて言うなら「科学をネタにみんなで楽しむ」だろうか。しかしこれも馬鹿にはできない。成功すればスポンサーが増え、内容は充実する。客層が広がり、「ここでしゃべりたい」と思う科学者、技術者が増える。運営の補助役として、地元の大学で自然科学を専攻する大学生がボランティアとして参加し、社会との交流を体験する。「楽しさ」を共有することが、③地域には経済効果を、聴衆には満足感を、関係者には能力開発の機会を提供する。回り道のようにだが、意外に効果は大きい。

私が言いたいのは、日英のどちらがいいということではなく、両者の違いの底にあるのが「科学を文化として楽しむ」という意識の濃淡ではないかということだ。紹介したように、英国における科学と社会との距離は、日本より明らかに近い。とはいえ、英国国民が科学を深く正確に理解しているかというところではない。ただ、彼らは科学を音楽やカイガや文学といった文化の一ジャンルとして「わからないけどおもしろそうだ」とか「これは好き、こっちは趣味に合わない」という\*スタンスでとらえる。あるいは「この程度は知っておいた方がいい」という教養と考えている。

日本はどうか。科学・技術といえど「役に立つ」とか「天然資源のない日本が生きる道」などと、気負い気味のメリットが強調される傾向が強い。それは受け手には時に押しつけがましく写る。これでは「わからない」↓口を出す資格がない↓関係ない↓嫌い」という悪循環にはまってしまう恐れがある。もちろん科学・技術は役に立つし、国を強くする。そこに異論はないが、科学を文化として楽しむ意識が共有されれば、裾野はもう少し広がるはずだ。「役に立つもの」ほど大きく取り上げるマスコミの報道姿勢が障害になっているという指摘もある。ただ、天文学や化石に関する発見や難しい数学の定理が解か

(注)

\*1 チャプリン…イギリスの映画俳優、映画監督、コメディアン。

\*2 ニュートン…イギリスの物理学者。

\*3 彫像…彫刻した像。

\*4 ジャズ…音楽の種類。アメリカのダンス音楽から起こった軽快なリズムの音楽。

\*5 チェルトナム…イギリスのコッツウォルズ地方のはしに位置する人口約九万の街。

\*6 ジャーナリスト…新聞・雑誌のニュース解説や原稿をあつかう記者、編集者。

\*7 リチャード・ドーキンス…イギリスの自然科学者。

\*8 ポンド…イギリスの通貨単位。

\*9 スタンス…姿勢。立場。

\*10 メリット…長所。利点。

れたといった、国益や特許とは無縁のニュースが、読者の注目を集めることも事実で、そこに私は希望を見いだす。

明治維新以来、西欧に追いつけ追い越せで科学をもち立ててきた日本にとって、科学を楽しむ余裕などなかったのかもしれない。江戸時代の教養人たちが和算を楽しんだり、からくり人形を愛でるといった科学・技術とのつきあい方が、明治維新以降、衰えていったのは残念だ。

見せ方、提供の仕方によって、再び科学を楽しむ文化が育ってほしいと思う。そのためには、科学・技術が持つそのものの面白さを何倍にも生かす工夫に、もっと努力が払われている。⑤「ネタはいいのに仕事がまずい」は、田舎の寿司屋によくある評価だが、今の日本はそれに似ている。職人は客の舌によって鍛えられるが、客の舌も「いいもの」をたくさん味わわなければ鍛えられないのである。

(元村有希子の文章による。問題作成にあたり一部手を加えた。)

※11 西欧：ここではヨーロッパ、アメリカなど西洋のこと。

問一 線部(a)～(d)のカタカナを漢字に改めなさい。

問二 本文全体を意味の上で大きく五段落に分けるとしたら、第四段落はどこから始まりますか。最初の五字で答えなさい。

問三 線部①「さほど努力しなくても」とありますが、たとえばどのような努力ですか。一つ挙げなさい。

問四 線部②「彼」とはだれを指しますか。本文中よりぬき出して答えなさい。

問五 線部③「意外に」とありますが、どういうことが「意外」なのですか。「科学フェスティバルはふつう、」につづけて、「～こと。」で終わるように、五十字以内で説明しなさい。

問六 線部④「そこに私は希望を見いだす」とあるが、筆者はどこに、どのような希望を見いだしているのでしょうか。最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 科学を文化として楽しむ意識が共有されれば、少しは日本のマスコミの報道姿勢を変えることができる可能性がある。
- イ 今まで通り科学・技術に関する報道を続けることで、日本人の科学に対する興味や関心をさらに高める可能性がある。
- ウ 日本人の科学・技術に対する関心が高まることで、英国や他の国に負けない科学力を持つことができる可能性がある。
- エ 一見役に立たないようなものに関心を持つ人がいることで、日本に科学を文化として楽しむ意識が育つ可能性がある。

問七 線部⑤について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「ネタはいいのに仕事がまずい」とはどういう意味ですか、本文にそつて三十五字以内で説明しなさい。
- (2) その結果、筆者は何が問題であると考えていますか。本文中から三十字でぬき出し、最初と最後の五字で答えなさい。

問八 一と二の本文を読んだあなたは、Aさんと疑問や感想を話し合いました。次の会話を読んで、あとの問いに答えなさい。

Aさん 「『充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない』という言葉を聞いたことがある。『科学』と『魔法』って相反するようだけど、共通点もあるね。」

あなた 「そうだね。どちらも人間にとって便利だという点と、①」という点で共通しているね。」

Aさん 「二の『魔法のリコーダー』なんて本物だったらまさにそうだね。でも『ぼく』は、最後は魔法を信じたのだろうか？」

あなた 「どうだろうね。本文に②とあるから③」と思うよ。」

Aさん 「今では当たり前前の科学技術も、百年前なら魔法のように思われ、信じられないだろうね。」

あなた 「『携帯電話』が広まったのは、私たちが生まれる少し前らしいよ。つい最近だよ。そうそう、『携帯電話』の技術って、もともと戦争時の通信のために開発されたんだって。」

Aさん 「へえ、そうなんだ。今はいっぱんに多くの人が使っているけど、最初はそんな目的で作られたんだ、知らなかったな。そのことじゃないけど新聞を読んだり、ニュースを見たり聞いたりしても、知らされていないことってあるよね。」

あなた 「三の筆者が言っているようにマスコミやメディアは情報を④⑤することもあるからね。」

Aさん 「二の『ぐるぐる巻きの男』の言葉も、三の『科学フェスティバル』自体も一種の情報だよ。受け取り方で結果が大きく左右されるね。」

あなた 「だから『魔法』にしても『科学』にしても、その情報に対して⑤」ことが大切なんだよ。」

(注) イギリス出身の作家、アーサー・チャールズ・クラークの言葉。科学解説者としても知られ、代表作に『二〇〇一年宇宙の旅』がある。

問九 以下の指示にしたがって①②③④⑤をうめなさい。

【指示内容】

- ① は自分の言葉で十五字以内で答える。
- ② は一の本文中からぬき出し、最初と最後の五字で答える。
- ③ は自分の読みとりを答える。
- ④ は漢字二字で答える。
- ⑤ は自分の言葉で二十字以内で答える。

